

ホームステイの旅 in ジョージア

2016



田中 成美

2016/11/30

1、広い、広いアメリカの家

「成美さん！ 成美さん！」

ドアの外からかわいい声が聞こえて来て、目が覚めた。
お世話になっている A さんの 7 歳になる娘さん、K ちゃんの声だった。

成田からの 12 時間のフライトの疲れか、それとも時差ボケか、起こされるまで深い眠りをむさぼっていた。

それにしてもここは静かだ。夜も朝も物音ひとつ無く、鳥の声ひとつ聞こえない。
A さんは、「西洋の家は気密性が高いからですよ」と言われるが、そればかりでもなさそうだ。

ここは日本流で言えば、農地を開発して作った新興住宅地である。しかし、ここは畑ではなく、松の森林を開発して作った住宅地なのだ。こういう住宅地が森林の中に点在している。それが、アトランタ市から高速で約 1 時間半離れた、ここピーチツリー市なのだった。

日本だと隙間なく住宅地に開発してしまうところだが、ここは広大な大陸だ。有り余る国土があるからだろうか、森も至る所に残されていて、森の中に住宅地があるという印象である。

A さん宅の裏庭の奥は松林になっていて、リスやアルマジロが頻繁に顔を出すほどの、自然の豊かな所である。

K ちゃんに起こされて、あわてて身支度を整える。

私の部屋は屋根裏部屋になっていて、英語ではアティックと呼ばれるている。屋根裏部屋と言うと、日本では粗末な感じに響くが、西洋の家では立派な部屋である。特にプライベートなバスルーム(トイレも)と洗面所が付いているのはとても便利だ。

A さん宅の家には他に 3 つの寝室があるが、どの部屋もプライベートなバスルームと洗面所が付いていて、その贅沢な発想に驚いてしまう。

リビングも何十畳もの広さで、吹き抜けの天井はどこまでも高い。

ここジョージア州は地震もなくハリケーンも来ないそうだ。これが日本だったら、地震にとっても弱い設計となってしまうが。ここでは NO PROBLEM。

やはり、地震のない所、しかも国土が広いため地価が安い所は違う。どの家も殆どが 1 階建てで宅地をぜいたくに使っている。

「地震がない」、それでだけで妙に羨ましいのは、あの大地震を経験したせいと言えそうだ。

朝食後、K ちゃんと一緒に近所を散策する。

どの家も優雅な佇まいを見せている。

こんな住宅地は中上級と言えるのだろう。A さんのお父さんによると、家賃は 20 万円だそうである！

でも、ちょっと離れた所に黒人のスラム街があるらしい。金網を張り巡らしてあって、住んでいる人達の雰囲気も悪いのだそうだ。

やはり、格差社会もろ出しのアメリカがここにもある。



(Aさん宅の裏庭で一休み)



(広い一階建ての家が立ち並ぶ)

1、フレンドリーなピーチツリー市の人々

私がお世話になったAさんの家は、人口が約3万人のピーチツリー市にある。深い森に囲まれた、この気持ち良い市を、一段と気持ち良さそうに行き交っている人達がいる。それはゴルフカートに乗った人達である。広い車道や、住宅地の中、松林の中を縦横無尽に張り巡らされたカート道。このカート道を数多くのゴルフカートが行き交っているのである。秋風を受け、燦々と降り注ぐ太陽の光を浴び、いかにも気持ち良さそうにゆっくりと走っている。カップル、ファミリー、あるいは一人で、気ままに楽しそうに走っている。買い物などが主な目的のようであるが、ゴルフクラブセットを乗せたカートもよく目にした。私もゴルフをするので、「いいなー！」と思いながら見つめたものだ。レンタルもできないことはないが、週に何百ドルもするようで、早々と諦めた。このゴルフカート、所有するのもけっこうなお値段がするようで、これを持つのも一つのステータスだそうだ。

こんな環境の良い所で、ゴルフカートでゆっくりとお買い物、あるいはゴルフに出かけるのは、さぞ楽しい事だろう。誰もがニコニコしているのも頷ける。

とうとうカートに乗る事は出来なかったが、散歩していて迷った時など、何度か道を尋ねたことがあった。どの女性も男性も丁寧に教えてくれて、中には「送って行ってあげましょうか？」とオファーしてくれた若者もいた。(鼻ピアスをいくつもしたお兄さんだったので、用心して断ったが。)

また意外なことに、こういう事もあった。

Aさん宅のすぐ近くに巨大なウォールマートがあって、歩いて何度か買い物に行ったことがある。旅行者である私に必要な物はごく限られていて、1品か2品だ。日本のショッピングカートの2倍はある大きなカートに入っているのは少しだけだった。あるレジに並んでいると、「あなたは少しだけね。前に行きなさい」と、それも2人の奥さん達が前の方に順番を譲ってくれた。

これには私も感心してしまった。

私は日本のスーパーで、順番を譲った経験もないし、譲られた経験もない。

「ここは本当にアメリカ？」とさえ思ってしまう程であった。



(気持ち良さそうなカート道)



(ゴルフカートを所有するのもステイタスだとか)

2、 ウーバ (UBER) で便利に移動

今、私の手元にあるスマホの画面には、「ウーバ (UBER)」のアプリがまだ残っている。そして、Gメールを見ると、今回のアメリカ滞在中に使った「ウーバ」の詳しい領収書も残っていて、どこか懐かしい感じがする。

運転者の名前、かかった時間 (例えば 23 分 42 秒のように)、通ったルート (地図に通った道路が青く塗られている)、そして代金 (もちろんクレジット払い) が明確に記載されている。

この「ウーバ」には本当に助けられた。

「アトランタ市にちょっと観光に行きたい」と思っても、ピーチツリー市からは電車もない、バスもない。唯一の交通手段は「車」のみ・・・ここジョージア州もアメリカの車社会の現実を如実に突き付けて来たのだ。

ステイ先の A さんに相談してみると、「正直言います、私もここから高速で、しかも 140k ぐらいは軽く出すんですが、それでも 1 時間半もかかる場所ですので、送迎だけに 2 回も往復するのは気が重いです。あさってはアトランタに行く用事がありますから、行きだけは載せて行ってあげられますけど・・・いっそのこと市内観光と帰りは「ウーバ」を使ったらどうですか？」との、納得行く 9 お返事だった。

これが私と「ウーバ」との出会いだった。

A さんの説明によると、「ウーバ」は一口で言えば、スマホでハイヤーを呼べるサービスだそうだ。サービス範囲内であれば、スマホで迎えに来て欲しい場所を地図上に指定し、何分で迎えに来るかも表示される。

支払いは前もって登録したクレジットカード決済になるので、降りる時に面倒な小銭のやり取りもいらず、車も中、高級車だそうだ。運転手になるのもチェックが厳しく、犯罪歴が少しでもあればなれないそうだ。

「危険かも」との不安もあったが、他に選択肢はない。さっそくアカウント登録をして会員になった。その時に分かったが、何とこの「ウーバ」は世界の500を超える地域で展開されているらしい。

翌朝、Aさんの運転でアトランタに行き、朝食を兼ねてスターバックスに寄った。

「ではさっそく使ってみてください」とのAさんの指示で、スマホ画面の「UBER」アプリをクリックする。

すると地図上に、車の絵が2~3台ウロチョロしているのが見えた。下の方に運転者の名前と写真、車の種類、何分で到着するのか、驚いたことに同乗者の名前と写真も出ている！

「え？同乗者もいるの？」と不安倍増で尋ねる私に、Aさんは「同乗者がいるとずいぶん安くなると聞いてますよ」と落ち着いた様子で答えた。

そして、「予約しましょう！」と言って、ためらう私をよそに「予約する」をクリックしたのだった！

画面上の地図を見ていると、GPS機能で今その車がどこにいるのか、動画を見ている様に分かるのである。これは車のドライバーにも同じ様に、私達が立っている所が明確に分かるということだ。しばらくすると、私達のところ車がピタッと止まった。画面で知らせてあったように、ホンダのアコード車であった。

ヒスパニック系かと思われるドライバーが、“Are you Narumi?” と発音しにくそうに私の名前を尋ねた。

“Yes”と答えて乗り込むと、隣に同乗者がいた。既にメールで通知してあったように、Michelさんだった。

「では楽しい一日を！」と笑顔で手を振るAさんを後に、車が進みだした。

車の中では同乗者Michelがドライバーと会話を弾ませていた。会話が途切れた頃合いを見計らって、Michelに話しかけてみた。

私：「私、ウーバを利用するのは初めてなんですよ」

Michel：「そうですね、私は通勤に毎日使ってますよ。とっても便利です。」

といった感じで、すぐに打ち解けた。

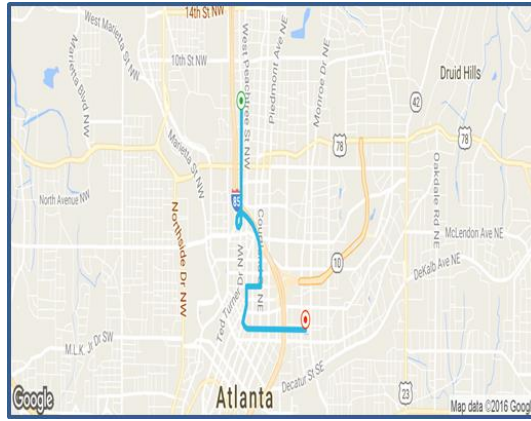
しばらくして、Michelが降りた後は、ドライバーは私に話しかけてきた。色々なお話の後、寿司の話で盛り上がった。何でも、ワサビを知らなかったらしく、寿司だと思って一度にまるごと口に入れて、後が大変だったらしい。久しぶりにお腹の底から笑わせてもらった。

このような、お客様との会話もサービスに入っているようだ。後で分かった事だが、☆の数でその運転手を評価できるシステムになっていた。

「☆をたくさん頂戴ね」と言われて車を降りたが、悪い感じはしなかった。

支払いはもちろん、全てクレジットカードでとても便利で安全だ。

今から高齢化が急速に進む日本、ぜひこういったカーシェアリング的な民間タクシーが普及して欲しいと思った。



(領収書にある、使ったルート表示)

3、 マーガレット ミッチェル ハウス

Aさんと二人で、ジョージア工科大学のすぐ近くにあるという「マーガレット ミッチェル ハウス」を訪ね歩いて、やっと到着したのは1時間半ぐらい歩いた後であった。途中で学生風の女性に道を尋ねたが、「マーガレットミッチェル？」といった感じで、知らなかったのが意外であった。

今でも、聖書の次に売れている本「風と共に去りぬ」は知っていても、作者のマーガレットミッチェルの名前は知らない人は、きっと多いのだろう。

疲れ切った足をかばいつつ見上げると、目の前には年代物のアパートを改造した記念館がひっそりと佇んでいた。

そっとドアを開け、入場チケット販売所に行くと、愛想の良いスタッフが「ちょうどガイドツアーがすぐ始まりますよ！入金後は後で結構ですから、すぐお入りください」と機転を利かせて案内してくれた。

こういうことは、アメリカにしては本当に以外である。私も以前にニューヨークやロサンゼルス、コロラド等何度か行ったことがあるが、アメリカでこんなに親切にされるのは初めてで、「ここはアメリカ？」と問いたくなる。

ガイドの前に数人が待っていた。私達に加わると、早速ツアーが始まった。

ガイドは先ず、「今日はどこからお出でになりましたか？」と尋ねることから始めた。私達が「日本から」と告げると、「遠い所からありがとうございます！日本からの参加者は、私は初めてです！」と、とても嬉しそうであった。

ここで、ガイドのお話を要約してみたい・・・

★アトランタのミッドタウンにある年代物のアパートを改造したこの記念館は、

マーガレット ミッチェルが実際に暮らした居住エリア、

彼女の人生と作家となるまでの経緯を語る展示エリア、

そして原作出版のほんの3年後、1939年に映画化され大ヒットとなった映画『風と共に去りぬ』の博物館がある。

家そのものは1899年に建造され、1919年に3階建てのチューダー様式のアパートに改造された。ミッチェルと彼女の夫は1925年から1932年までこのアパートで暮らし、その間に彼女は自らの人生体験を綴るように『風と共に去りぬ』の原稿を書いたと言われている。

ちょうど事故で骨折して読書三昧の日々を送っていたマーガレットは、手持ちの本を読んでしまい、

退屈していた。その時、「本がないなら、自分で書いたら？」と勧めたのが、この夫だったらしい。

元々出版するつもりなど毛頭なかったそうだ。主人公のスカレットは自分がモデルであったし、レットは自分の前夫がモデルであった。いわば私小説で書いていた彼女の原稿はひょんなことから、一躍脚光を浴び、後年ピューリッツァー賞を受賞した。

その不朽の名作を産んだアパートは細部に至るまで、ミッチェルが暮らしていた当時そのままに復元されている。

まるで、マーガレットがちょっと留守の間にお邪魔している様な感じであった。彼女が使った机、タイプライター、ドレッサー、ベッド、浴室、トイレ・・・本当に彼女が今帰って来るかのようだった。

でも考えれば、彼女がこのアパートに暮らしていたのは1929～32年で、日本で言えば昭和初期だ。それなのに、もう浴室ではひねればお湯が出て、トイレは水洗・・・こんな便利な暮らしをアメリカでは普通にやっていた事にも驚いてしまう。

日本ではまだ薪で沸かす五右衛門風呂、そして水洗トイレなんて、夢のまた夢の時代だっただろう。それなのに、そんな国に戦争を仕掛けたのだから、その点だけでも無謀そのものだったと言える。

そんなことを考えながら展示物を色々見ていると、マーガレットの若いころの写真が飾ってあるのに気が付いた。

気品があって本当に綺麗な女性だったようだ。実際何人もプロポーズした男性がいたらしい。映画「風と共に去りぬ」のワンシーンの様に、5、6人の男性に囲まれている写真もあった。

学生時代には婚約した男性もいたが、第一次大戦に参戦して1年後に戦死。そしてその後二人の男性と同時に交際をする。やはりスカレットそのものだ。

しかし、「風と共に去りぬ」はラブストーリーだけの小説ではない。南部アメリカのターニングポイントだった「南北戦争」も、鋭い考察でリアルに描いてある。それは、実際に戦った親戚からつぶさに話を聞いて集め、そして書いたから可能となったそうだ。

何はともあれ、あれだけの大作を人々の興味が色あせぬような素晴らしい構成でまとめたのは、やはり並々ならぬ才能の証拠である。

帰国してから再度「風と共に去りぬ」の映画を見た。映画の要素のひとつ「赤い土」が、懐かしく思い出された。

いつの日か、原書も紐解いてみたいと思う、今日この頃である。



マーガレットミッチェルハウスの外観

6



“GONE WITH THE WIND”は今も輝く



リビングルーム



作品を書いた時のタイプライター(レプリカ)



ドレッサーも今使ったかのよう



若き日のマーガレットミッチェル

5. キング牧師の生誕地を訪ねて

「ウーバ」の運転手との会話を楽しんだ後、私は「マーティン ルーサー キングジュニア国立歴史地区」のビジターセンターの入り口で車を降りた。

「あの建物がビジターセンターです」と運転手は言い残して、去って行った。

ちょっと不安だったが、歩みを進めて行った。すると向こうの方に、インドのガンジーの像が見えた。これはキング牧師がマハトマガンジーを崇拝していて、命を賭して非暴力の抗議で、公民権を訴え続けたからである。

後年、「自分に最も影響を与えた人物は、妻とガンジーだ」と言ったそうである。

ドアを開けるとフロントデスクが見えた。

どうも盲目らしいシニアの男性が笑みを浮かべて立っている。

「大人一人お願いします、いくらですか？」と尋ねると、

「ここは無料です」との返事が返って来て、また意外な感じがした。後で分かったことだが、ここ歴史地区の関係建物への入場料は全て無料だそうだ。

館内に入ると、数多くの展示品を通して、キング牧師の生涯を紹介してあった。ひとつひとつのセクションがパネルとともに映像で説明されており、公民権運動に生きたキング牧師の人生を、じっくりと偲ぶことができるようになっていた。

また、30分間のキング牧師の生涯をまとめた映画も見ることができた。

その中で、キング牧師の色々な演説が多く出てきたが、あの有名な「I have a dream.」だけではなく、どの演説も言葉が選び抜かれ、意味深く洗練されていて、それを牧師が実際に演説する時は、独特の抑揚がついていて、まるで詩の朗読を聞いているようであった。

(これだったら、黒人だけでなく多くの民衆が感動し、動かされたはずである) と納得した。

ビジターセンターを出た後、牧師の生家を見るべく少し歩いてみた。

ここ歴史地区周辺一帯は保護地区に指定されているため、数多くの19世紀および20世紀初期の古い家々が美しく復元保存されており、当時を偲ぶことができる。

そのうちに、昔の小さな消防署が目に入った。興味が沸いたので入ってみると、スタッフの男性と観光客の男性が話していた。

しばらく展示物を一人で見ていると、そのスタッフの男性がやって来て、「動画がありますが見ますか?」と尋ねて来た。

もちろん“YES!”と答えると、席に案内してくれたが、私一人であった。

この動画から多くの事を知ることができた。

キング牧師の生家はこの消防署の近くにあり、子供の頃の牧師はよくこの消防署にも遊びに来ていた。そして、大人になったら消防士になろうとも思っていたらしい。しかし当時は消防士になれるのは白人だけだったそうだ。この差別は少年の心にさぞ深い傷を与えたことだろう。

それで牧師はその夢を諦めざるを得なかった。

その後、黒人にも道が開かれたが、仕事の内容は消防ではなく雑用係だったそうだ。それでも黒人達は喜んで、誇りを持って仕事に励んだらしい。

南北戦争後の1862年のリンカーン大統領の奴隷解放宣言により、米国の奴隷制は廃止された。しかし、それは人種差別の撤廃を意味するものではなく、学校、トイレ、プール、バスなどにおいて、白人と非白人の区別により、異なる施設が用いられることは容認されていたのだ。

また、6歳のときに、一緒に遊んでいた近所の白人の子供の母親から「黒人とは二度と遊ばせません」と最初の人種差別を経験。高校時代には、討論大会で優勝した帰りのバスの中で白人から席を譲れと強制されたこともあったそうだ。

寝強い黒人差別がこの話からも伝わって来た。

動画を見終わってから、「生家はどこにありますか?」と尋ねてみた。そしたら、

「あいにく今日は閉まっていますよ。でも外観だけなら見れます。この通りをまっすぐ行くとすぐありますよ」

と親切に教えてくれた。

生家に入れなかったのはとても残念だったが、(牧師の子供時代を過ごした地区を今歩いている)と思うと、何とも言えない感動が沸き起こって来た。

明るいうちにはステイ先に帰りたいので、あまりゆっくりもしておれず、次の目的地へ行くことにした。さっそく「ウーバ」を予約した。

車を待っている間に、近くにいた黒人男性が近づいて来て、

「いくらでもいいから、お金を恵んでくれませんか」と手を差し出した。驚いて他の場所へ立ち去ると、また違う男性が同じようにお金を請いにやって来た。

慌てて、「私は旅行中でお金ないんです！」と言ってすぐさま足早に立ち去った。そしたら何と、スマホを置いたまま逃げて来ているではないか！

走って引き返すと、案の定、その黒人男性がスマホを持って見ていた。

「That's mine!」と大きな声で奪い返して、逃げた。

それまでの崇高な気分はどこへやら・・・

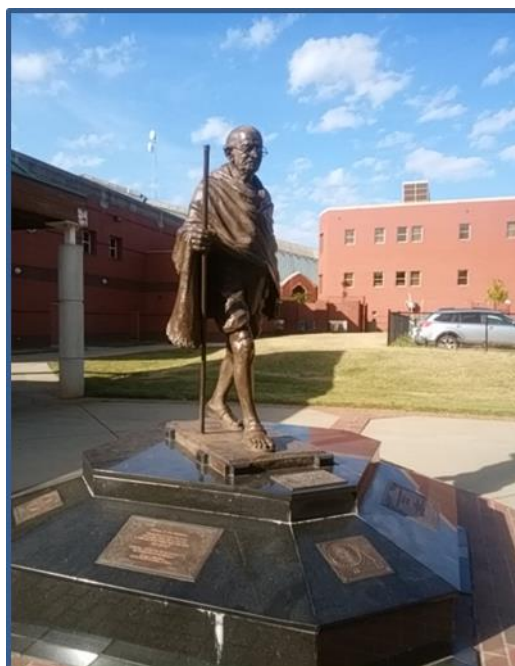
車はまだ来ない! 「どうしよう」と不安の底に落ちようとしていたら、有り難くもウーバタクシーがやって来てホッした。

今だに、しかも歴史的な黒人運動家の記念の場所で、あんな事をやっている黒人達がなくなるかなんて。キング牧師もきっと悲しんでいることだろう。

人種問題の難しさ、複雑さを垣間見る思いがした。



今回のジョージア州訪問で最も来たかった所



キング牧師が崇拝したガンジー



キング牧師の生家



当時の黒人労働者達が住んでいた家並み

6、終わりに

旅を終えて、ひと月余りが経った。

今度の旅を振り返ってみて、最も心に残った事・・・それはある日のウーバ運転手との会話であった。

アトランタ市街から北部の方に、車で約 30 分の距離にある「歴史センター」に行った後、ステイ先に帰宅すべくウーバを使った。

そこからステイ先まで何と 90 分の乗車時間だった。その間、運転手と会話する以外に何もすることは無い訳だが、運よくこの運転手がとても話題豊富で、あっという間の 90 分だったのだ。

「歴史は好きですか？僕は歴史と哲学が好きです」から始まり、日本文化、日本の学校教育、アメリカの雇用状況、大統領選、etc, etc. 本当によく話したものだ。

その中で最も印象に残った話題は、アメリカの医療事情だった。

エジプトの隣国チュニジア出身のその男性は、自国の政府奨学金でアメリカに留学し、MBA（経営学修士）を取った後、会計士をしているのだそうだ。

母国で革命が（俗に言うアラブの春）が起こり、今は泥沼化して戦争になっているそうだ。それで、危険なのを心配して、両親をアメリカに呼び寄せて、共に暮らしていると言う感心な親孝行な息子だ。

話が進んで行くうちに、「母親が糖尿病なので、医療費がかかるんですよ」と、詳しく説明してくれた。

オバマケアが始まり、自分の収入に合わせて、保険のコースを選べるらしい。そして、保険のカバーする範囲内で収まれば、追加の出費は要らないが、その男性のお母さんはどうしても、それでは足りないらしい。

それで年末に帳尻を合わせて、超過した分を払わないといけないそうだ。それがけっこうな額になると言う。

「もうワンランク上の保険にする方法もあるんですが、保険料が高くて払えないんですよ！」との

ことだ。

それでも、「でも以前よりは良いですよ。どうにか医療を受けれますから。以前だったら、何もできないままだったでしょう」とのことだった。

選挙キャンペーン中は、「オバマケアの廃止」を訴えたトランプ氏は、本当に廃止するのだろうか？
そしたら、病院にも行けない人々がまた急増するのでは？
よそ事とはいえ、心配だ。

そんな、庶民の本音も聞いた今度の旅であった。

最後に、この貴重な経験をするチャンスを与えて下さった、Aさんとその御家族に、心より感謝を申し上げて、この旅ノートを終わりにしたいと思う。

2016年 11月末日
田中成美